

[課題演習報告]

接続期における学校適応の促進に向けた実践
—保幼小の連携による保護者支援を軸として—

衛 藤 夏 子
Natsuko ETO

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻生徒指導・教育相談リーダーコース

福岡市立舞鶴小学校

(2022年1月12日受理)

本研究は、全ての児童の学校適応の促進を目指し、保育園、幼稚園、認定こども園から小学校へ入学する接続期に、保幼小が連携して、保護者支援を行う教育プログラムの内容と推進の調査をふまえ、実践の検討を行った。まず、接続期の保護者が必要としている支援について、在籍校の現状の調査と、全国の自治体が行なっている家庭教育支援と接続期に特化した家庭教育プログラムを収集し、整理した。そして保育園、幼稚園、認定こども園と保護者支援に関わる情報の共有による教育プログラムを作成、実施した。同時に保護者への質問紙と教育プログラムに関係した職員への質問紙調査から分析、検討した。その結果、保護者支援を軸とした保幼小の連携が、児童の学校適応に有効であると示唆された。一方、多くの園から入学を受け入れる学校で、全園との連携を遺漏なく進めることや、校内外の連携推進のための人員を確保することに、課題があることが示された。

キーワード：保幼小の連携、接続期、保護者支援、家庭教育支援

1 問題と目的

(1) 主題設定の理由

ア 在籍校の状況から

在籍校は、児童生徒数約970名の施設一体型小中連携教育校である。例年30を超える保育園・幼稚園・こども園からの入学者を受け入れている。現在長期欠席者として挙げられている児童生徒数は18名であり、その中で13名は小学校入学時に行きしぶりや遅刻、極度の緊張などの様子が見られた児童である。不登校傾向が始まった児童生徒の保護者からは、不安や困惑の声を聞かれる。このような、入学時に始まる保護者の不安や困惑を軽減することは、児童の学校不適応の深刻化を防ぐために意義ある取り組みであると考えられる。

イ 社会の要請から

全国の5歳児の95%が保育園、幼稚園、認定保

育園での保育を受けている(文部科学省, 2015)。その中で、教育基本法(2006)・学校教育法(2007)の改正において、幼児教育は学校教育体系のスタートの段階に位置付けられてきた。また保護者支援に関し文部科学省(2019)は、「全ての親の親としての学びや育ちを応援することが、家庭教育支援の基本である」とし、保護者支援の重要性を強調している。

乳幼児期には、保護者は、多様な場において親の育ちを応援されている。保育所、認定こども園、幼稚園では、保育所保育指針(厚生労働省, 2017)・幼稚園教育要領(文部科学省, 2017)により、保護者支援が明確に位置付けられている。

家庭教育は、乳幼児期から学童期へ途切れなく続いていくものであり、その主体者である保護者に対する支援も途切れなく続いていくことが望ましい。そのため、学校には家庭教育の主体者である保護者への支援が求められている。

(2) 主題の意味

入学を控えた年長時の9月頃から小学校1年生7月頃までを接続期と言い、その時期の保育、教育は児童のその後の学校適応に大きく影響すると言われている(文部科学省, 2015)。

本研究では、保幼小が連携して行う教育援助活動の対象を児童と児童を支える保護者を含めることとし、保護者支援を行うことを検討する。

(3) 研究の目的

本研究は、先行実践などの調査をふまえ、小学校への接続期に、保育園、幼稚園、認定こども園との連携による保護者支援を軸とした教育プログラムを作成、実施し、検証することを目的とする。

2 予備研究

(1) 目的

保幼小が連携して行う教育プログラム「フレッシュスタートプログラム」(以下、FSP)作成に向けた情報収集と、保護者支援の動向を把握する。

(2) 期間 2020年5月～7月

(3) 内容 先行研究や文献より、プログラム作成のため、先行実践を調査し、動向の検討を行う。

(4) 結果

国内の自治体を対象に家庭教育支援に関する取り組みを検討した結果、全ての自治体に何らかのプログラムが設置されていた。地域への家庭教育支援チームの設置が促進され(文部科学省, 2010)、社会福祉として、地域や企業もその一翼を担っていることが多い。就学前の子どもがいる家庭に対する支援は、保育園は厚生労働省、幼稚園は文部科学省、認定こども園は内閣府と、異なる機関により管轄されていた。そのため家庭教育支援が、そのまま学校が引き継がれるには障壁があった。

一方で、ほぼ全ての自治体が、小学校入学時やその後の学童期の子どもを持つ養育者に対する支援プログラムを、ホームページ上で提供していた。しかし、家庭教育への支援は、自治体ごとに担当する部署が異なり、学校教育との連携のあり方には自治体ごとに隔たりがあるという課題が示された。

3 研究 I

(1) 目的

保護者が必要とする家庭教育支援について、児童と保護者の実態から調査し、検討することを目的とする。

(2) 期間 2020年5～8月

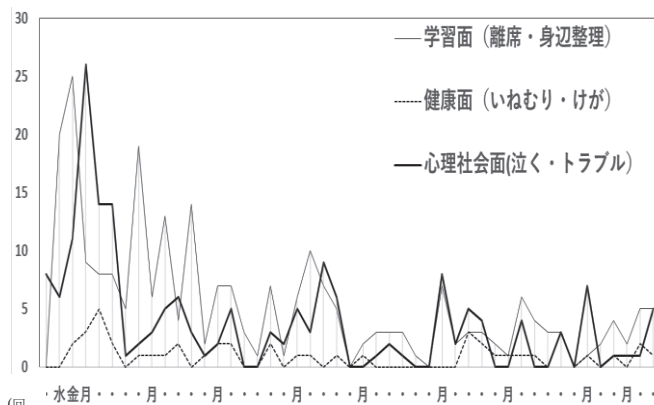


図1 不適応行動の数の推移 5/23-7/29

(3) 内容

令和2年度入学児童と保護者に対して担任や報告者らによる観察と記録による実態把握、また懇談会(8月)で保護者が必要としている入学前後の家庭教育・保護者支援ニーズの調査を行った。

(4) 結果と考察

学校不適応につながる児童の実態を表1、図1に示す。保護者の引率が教室まで続く児童もいることから保護者と離れるタイミングに対する支援の必要性があった。

また、離席・身辺整理ができない・困って泣いているなどの発現件数は、いずれも増減を繰り返しながら全体として減少していた(図1)。増えるのは休み明けの登校日が多い。このような状況から接続期において、小学校生活への身体的・精神的な準備と入学した後も家庭での休日の過ごし方について、保護者へ情報提供が支援として有効なのではないかと考えた。

質問紙調査では(8/26～9/7回収率48%)、入学に際して子どもの様子を「楽しみ・期待」と捉えている保護者が半数以上であるが、保護者の気持ちは「不安・心配・負担・緊張」が半数を上回っていた。そこで、接続期の保護者の不安の軽減のために働きかけることとした。

入学前の家庭練習(表2)では、入学準備期間の保護者の関心が低い「朝食」と「挨拶」の習慣化へ情報提供の必要性と、関心が高い登下校の安全に対応する支援の必要性が見えてきた。また「友人関係」の不安(表3)から、社会性の育成に関して、保護者のニーズは大きいことが示された。

表1 校門での登校支援の回数

	登校日	教師の誘導	保護者の同行
5月	3日間	0人	15人
6月	23日間	64回	13人
7月	21日間	32回	7人

表2 入学前に家庭で練習したこと
(n:76 第1子:49 第2子:20 第3子以上:7)

	通学路の安全	早起きの習慣	就寝	清潔・排泄	朝食の喫食	あいさつ	偏食の克服
第1子	65.31	65.31	63.27	53.06	44.90	36.73	20.41
第2子	65.00	50.00	35.00	30.00	10.00	30.00	15.00
第3子以上	57.14	71.43	71.43	57.14	71.43	28.57	42.86
合計	64.47	61.84	56.58	47.37	38.16	34.21	21.05

表3 入学前後で気になったこと・心配だったこと

学習面	<ul style="list-style-type: none"> ・学習が始まった途端、登校しぶりが見られた ・大量に出された課題プリントに、絶望感すら感じていた様子だった ・学習の遅れ ・学習についていけないか不安がある
心理・社会面	<ul style="list-style-type: none"> ・入学延期による心の不安定さがある(3件) ・園が恋しい様子が見られる ・休校に対する不安がある ・引っ込み思案だと思う ・仲のよい子と離れたこと ・登校時に泣いていたこと ・体験入学があれば良かったと思う ・大人数で過ごすことに不安がある ・友人関係がうまくいか不安がある(9件) ・話を聞くのが苦手だということ ・留守家庭子供会の指導員が怖い ・親子で話をしても通じていないと思う
環境面	<ul style="list-style-type: none"> ・登下校の安全(3件) ・学級発表が遅かった ・視力・聴力に対して不安がある ・生活規律の乱れ ・牛乳が苦手なこと

聞き取りの記録(表4)からは、不適応の原因を学校の中に探したり、保護者自身が困惑したりする声があった。担任の支援で子どもが友だちと仲良くなったり、登校後の様子を聞くことで安堵したりといった様子も見て取れた。学校が保護者に

表4 聞き取りによる保護者の声(要約)

感情の分類	状況に対する保護者の感情
戸惑い	<ul style="list-style-type: none"> ・家出るときからです。帰ったら楽しそうなのに(6/15) ・この子の特性ですね。つかれます(7/13)
原因探し	<ul style="list-style-type: none"> ・階段がきついで言ってます(6/8) ・ランドセルが重くて嫌がっています(6/26) ・学校が面白くないって言ってます(7/3) ・給食が気になるみたいです(7/9)
苛立ち	<ul style="list-style-type: none"> ・保育園に行き始めたときもそうでしたから(6/29) ・私が怒っちゃって、イライラしてしまってます(7/10)
安堵	<ul style="list-style-type: none"> ・担任の先生と友達のおかげでやっと安心した様子(7/29) ・「学校に行く」ことになれてきたみたいなんです(7/29)

学校生活の様子を伝えることは、保護者支援の大きな役割である。

イ 保護者支援の構想

予備研究から保護者に対する教育プログラムを整理した。幼児期の子どもを持つ保護者に提供する情報として、①食事・睡眠などの規則正しい生活習慣の確立②受容的養育態度による自己肯定感の育成③

挨拶など社会性の成長をうながす関わり方、などが挙げられた。

また、乳幼児期からのメディアとの関わり方や「読み聞かせ」など知識習得より情緒の安定を目指した取り組みが示されていた。

さらに両親だけでなく、祖父母が行う育児や地域の育児サークルなどについても示された。これらの情報は、公民館や子育て支援センター等でワークショップ形式や体験型の講習会を行うなど、参加者がそれぞれのニーズに応じた情報を主体的に受け取ることができるよう工夫されていた。

保護者支援は、小学校入学の準備期に子どもに必要な社会的な自立のためのスキルについての情報提供と養育者の教育援助活動の実践力の育成が求められていること、子育ての主体は保護者であることを尊重し、保護者が主体的に関わりを持つ支援を行うことが重要であると考えた。

一前(2017)は、保護者支援について、子どもを支える援助者としての保護者に対する支援と移行の当事者としての支援の両方を保幼小連携に組み込んでいくことの必要性を述べている。そこで、FSPによる保護者支援について、以下の点に留意して行うこととした。

○保護者が必要としている情報を分かりやすく提示すること(基本的生活習慣の確立と子どもの自尊感情の育成)

○保護者が主体的に関われるような子育て情報の提示と相談の場を用意すること

○保育園・幼稚園での保護者支援を繋ぎ、接続期の保護者が持つ不安や戸惑いを軽減すること

4 研究Ⅱ

(1) 目的 令和3年度入学児童へのFSPを実施し、検証を行う。

(2) 方法

ア 研究期間 2020年9月～2021年12月

イ 研究対象 令和3年度入学児童と保護者およ

び、関係する職員

ウ 実施内容

①保護者支援を軸としたプログラム作成

予備研究から保護者支援に対する視点を整理し、具体的な内容(図3)をまとめ、そこからFSPの中で活用するツールの作成をした。

②保幼小の連携体制

これまで保幼小連携(生活科の交流活動・園児の学校訪問・園の運動会の参観など)を行ってきた園の中から10名以上の入学児がいて、校区内にある園にFSPのモデルを依頼した。

③FSPの効果や課題の検討

令和3年度入学児童の保護者とFSPに関わる職員に対する質問紙調査を行った。

(3) 結果と考察

①保護者支援を軸としたプログラム作成

令和3年度入学児童と保護者に対するFSPを、入学前の10月から入学後7月までの接続期に試行(図3)し、検証した。なお令和3年度は、コロナ感染防止のための全国一斉休校中に始まったことから、入学前の入学説明会は中止、保幼小連絡会は短時間で行われた。入学式は5月に時間差での分散形式により行われた。その後も保護者が学校に一斉に集う機会や担任との対面の機会が大幅に減少した中、登下校時の保護者へのインフォーマルな聞き取りを行いながら、FSPと8月の学級懇談会で質問紙調査を行うこととした。

①保幼小の意見交流による連携体制の構築

令和2年度に協力を依頼した園は3園であったが、令和3年度は6園に増やした。入学式の1か月後、報告者とSSWが協力園を訪問し、意見交換を行った(表5)。SSWは校外の援助資源との連携を推進し、環境改善を図る役目があり、保育園、幼稚園との協力は欠かせないことから、次年度以

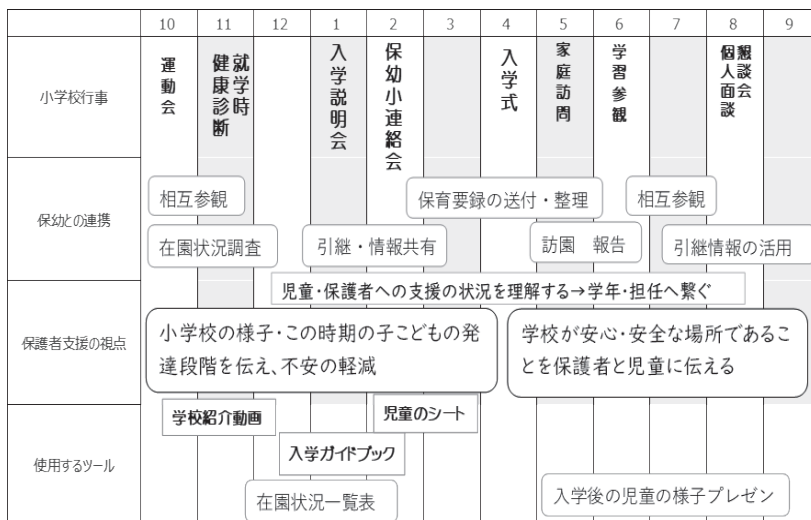


図3 FSP 試行版 R2年10月~R3年9月

降の保幼小連携の一端を担う立場にある。協力園が増えたことで、児童支援、保護者支援に関わる各園の取り組みを幅広く情報収集できた。訪問に関しては園側からも肯定的に捉えられていた。

その他に、小学校職員が園の行事を参観し、保護者に対面し、年長児の様子を把握し、入学に対する保護者と園児の期待を促すようにした。

また園職員の意見をふまえ、保護者が必要とする情報を盛り込んだ入学ガイドブック(図2)を作成した。

そして園の懇談会などを活用した学校説明会を実施し、保幼小連絡会・保育要録等で保護者支援を含む情報の共有と引継を行った。

園との連携の中で以下のことが見えてきた。幼稚園、保育園は保護者支援が業務として明確にされており、職員の尽力と共に保育ノートや毎日の送迎等の信頼関係構築のための機会が多くある。一方小学校では、そのような機会が多くはないことで、保護者支援が途切れるおそれがある。特に令和3年度は、保護者との対面の機会が極端に制限されることとなり、FSPによって入学前に園から得た保護者支援に関する情報は、入学後の担任が行う児童への教育援助活動に大きく役立つこととなった。

また幼稚園、保育園、認定こども園が行ってきた保護者支援を引き継ぐための工夫として、関わる職員の負担感を大きくしないように配慮しながら、以下のことに取り組んだ。

まず入学前に配慮を必要とする児童を中心に聞き取りを行っていた保幼小連絡会では、「児童のシート」を使うこととした。令和2年の行事は対面で行うことを避け、時間の短縮を図るなどの制限もあったため、あらかじめ「児童のシート(図4)」

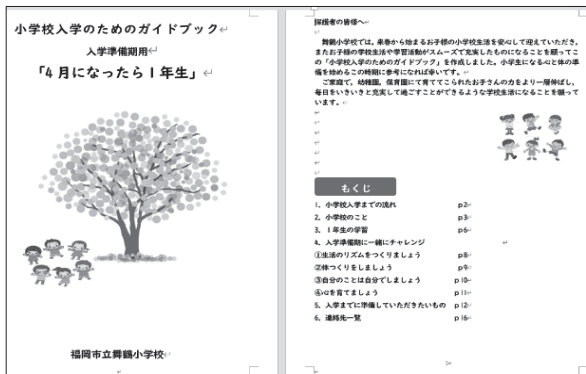


図2 入学ガイドブックの一部

表5 園との連携の実際

	2020年9月の訪問	2021年4月の訪問
目的	FSPの趣旨を説明し、協力のためのご同意をいただく。	入学後の1年生の様子を園に報告するとともに今年度の行事について調整する。
参加	校長・報告者⇒園長・主任	報告者・SSW⇒園長 主任 担当保育者
協力園と入学児童数	校区内A保育園(21) 校区内B保育園(9) 校区内C保育園(15)	校区内A保育園(16) 校区内B保育園(8) 校区内C保育園(19) 校区内D保育園(11) 校区外E保育園(7) 校区内F子ども園(5)
持参物	FSP 概要説明パンフレット	入学児童の様子写真
情報共有 連携の成果 課題	○入学後の様子を心配していたので是非、進めてほしい。 ○保育者では小学校のことがわからないので知ることで見通しが持て保育に活かすことができる。 ○保護者に園から入学を見据えたアドバイスをしてもなかなか聞いてくれない。 ▲コロナにより保育参観などの行事が無く、保護者とさえ対面の時間が少ない。 ▲以前は児童と園児の交流がもっとあった。	○元気に登校している様子を見て安心した。 ○コミュニケーションがとりにくかった保護者の子どもも学校になじんでいるようで安心した。 ▲気がかりであった児童の保護者は、就学時健診、入学説明会の参加を勧めても行っていないようだ。 ▲不登校傾向にある卒園児のことを知り、幼児期にしておくことは何か悩んでいる。

の記入を園に依頼した。内容は、福岡県の就学サポートノートを参考とし、これまでに園が行ってきた園児、保護者に対する支援を可視化するために入学予定者全員の記入とした。このシートは記

児童に関するシート(記入例) 令和〇年度入学児童 福岡市立〇〇小学校 ()

幼稚園名 保育所名 〇〇〇〇園 記入者 ()

本人の名前 (ふりがな) 〇〇 〇〇 (男・女)

生年月日 〇〇年 〇月 〇日

本人の得意なこと 好きなこと 外遊びが好き 高いところへ上るのが好き アニメ「〇〇〇」の主人公になりきって演じている。 かけっこで速く走れること 歌を歌うこと など

周りの人の関わりの中での良さ 自分から進んで遊びに誘う 後れている子に優しく動きます など

日常生活の中で支援を要する項目があれば、○を入れ、該当項目に関する状況や有効な支援等を記入してください。(特記事項がなければ空欄のままにしてください)

項目	幼稚園・保育所等での状況	有効な支援
健康面 (視覚・聴覚)		
移動		
食事	給食に苦手な物があると食べることができない。(主に肉)	代替食を持参
排泄		
衣服着脱		
感覚過敏	寒さに弱い(寒冷じんましんが出ることもある)	室内で着用できる上着を持参
こだわり	積み木をきれいに片付けたい(そろっていないと嫌がる)	きれいにそろえる時間を見越して片付けの声をかける
指示理解		
注意持続		
多動・衝動		
対人関係	自分から友達に話しかけることはほとんどない	保育者が声をかけて輪の中に入れる
意思伝達		
文字・数		
家庭環境	遅刻が多い 続くときには仕事・家庭の様子を尋ねて母親の気持ちと共有する。遠足など行事があるときは、前日のお迎え時に集合時刻を確認する	

○ 個別的教育支援計画の作成 (あり) (なし) どちらか○をおつけください。

図4 児童のシート

表6 園での説明会後の保護者の感想

知りたいこと	<ul style="list-style-type: none"> 準備物などについては、この時期よりはやく知らせてほしい。 小学校が主体的な学びを進めていくとしても、それにあわない子はどうすればよいのか。 親が一番気をつけておく事はなにか。 携帯電話は所持してよいのか。
学校へ要望	<ul style="list-style-type: none"> このガイドブックをもっと早く手に取りたい。 学校のホームページに掲載するなどの工夫をしてはどうか。 兄妹がいるが1年生と2年生では、担任の対応が違う。
取り組みへの意見	<ul style="list-style-type: none"> このような場で話を聞くことができて良かった。 入学する学校は舞鶴小ではないがこんな情報が欲しい。 保育士からも心構えについては、常に話しているがなかなか聴いてくれない。小学校の先生がきてくれることはありがたい。(両保育園園長より) 子どもが学校で、向き合っていく困難について、気がついた。(視力に不安をかかえる児童の保護者) 今年は日程調整が難しかったが、来年はぜひこのような会をしたい。(C保育園 園長)

入例を示し、記入者の負担軽減とこれまでの支援が途切れないようにする意図があった。

次に新たな試みとして協力園のB保育園にて入学説明会を行った。土曜日の保育参観後の10時30分~11時40分、内容は「4月になったら1年生」とし報告者が出向いて説明した。学校紹介動画と入学ガイドブックを資料として使用した。参加者はB保育園園長、職員2名、年長児保護者11名とC保育園園長と職員1名であった。説明会後の感想を表6に示す。入学前の保護者と学校が繋がる機会としては肯定的な意見が多く聞かれた。入学説明会のような大人数ではないので、保護者もリラックスして質問し、話ができる雰囲気であった。園側からは次年度も希望があった。

また接続期の家庭教育に必要な情報を家庭教育の指針としてまとめた「舞鶴すくすくロードマップ」を作成し、配布した。これは、保育園、幼稚園で保育の指針としている「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」(2017, 文部科学省・厚生労働省)を念頭におき、社会生活能力の発育の道筋を具体的に提示したものである。このような資料の提示は保護者の主体的な養育への支援の一つとして各自自治体で作成されたものに倣っている。

②FSPの検証

FSPについて、令和3年入学児童の保護者と、FSPの実施者である在籍校職員、協力園の職員と、

表7 R3年度入学 保護者質問紙の回答 (n: 121)

設問 そう思う3点 まあ思う2点 あまり思わない 思わない0	平均
①子どもの入学後、登校の様子に満足している	2.52
②就学検診時の学校紹介動画は保護者の不安解消に役に立った。	1.98
③入学ガイドブックを活用した。	2.40
④早寝・早起き・朝ごはんは習慣となっている。	2.30
⑤入学準備を始める前に比べて自分のことができるようになった。	2.46
⑥入学準備を始めて、よく褒めたり、認めたりするようになった	2.31

近隣小学校の職員に質問紙調査を行い結果を分析した。

ア 保護者支援について

保護者が必要としている情報を提供し、保護者の主体的な関わりとすることについて入学ガイドブックと学校紹介動画について検証した。令和3年度入学児童保護者に対する質問紙調査(4件法)の結果を表7に示す。

この結果をHAD(鈴木, 2013)によって分析したところ、「入学ガイドブックを活用した(質問③)」の回答と「入学後の子どもの様子の満足感(質問①)」とは、有意な正の相関がみられた($r(119) = .255, p < .01$)。またガイドブックの中に提示していた「子どもを褒める(質問⑥)」ことについての回答と「入学後の子どもの様子の満足感(質問①)」にも、有意な正の相関がみられた。 $(r(119) = .375, p < .01)$ 。

さらに「子どもができるようになったことがある(質問⑤)」に対する回答と入学後の「子どもの様子の満足感(質問①)」にも有意な正の相関がみられた。 $(r(119) = .412, p < .01)$ 。

表8 学校紹介動画に対する自由記述欄

<ul style="list-style-type: none"> ・動画の音声で、呼ばれた声が聞こえなかった ・校舎が広く、中学校と一緒に迷いそう ・不安の軽減はよくわからないが、学校の施設が理解できた ・学校が遠く登校が心配。他の小学生はどのくらい時間をかけているのか知りたい ・(学校は)子どもの様子を話してくれると安心できると思う(いいことも悪いことも) ・在学児童の家族だけがみれる写真サービスがあれば嬉しいです。 ・上の子ども通っている。不安はありません ・療育手帳第2種です 注意をお願いします(祖母)。 ・動画サイトなどでアップしていただけると家族で見ることができます。

このことは、入学ガイドブックを活用することで、保護者が入学後の子どもの様子に満足感を抱いたこと、子どもを褒めることが増え、入学後の子どもの様子の満足感が高まることを示している。

また入学準備期に、子どもができることが増えたと答えた保護者は、子どもを褒めたり認めたりすることも増えたことが示された。

入学ガイドブックの活用という保護者の主体的な行動により、入学後の子どもの様子の満足感に高まりがあり保護者支援として効果があったことを示している。

学校施設紹介動画(質問②)の回答の分析からは動画と児童の学校適応に対する満足感には、有意な相関はみられなかった。

しかし表8に示すように、写真や動画による学校生活への情報提供は個人情報の管理に留意した上で、適切に発信することで保護者のニーズに応えることが示されている。また校内見学など対面での行事が制限される現状では、このようなICTの活用は積極的に進めていくことが保護者支援につながるといえる。

イ FSP に対する検証

表9 FSPの検証のための質問紙調査(在籍校9名 協力園18名 近隣校9名)

設問 (4とてもそう思う 3そう思う 2あまり思わない 1思わない)	舞鶴小	近隣校	協力園
① 入学ガイドブックは、保護者の不安軽減や、児童の学校適応に役立つと思いますか。	3.50	3.78	3.71
② 「児童に関するシート」(別添、保幼小連絡会で使用)は、児童の情報の共有に活用できそうですか。	3.83	3.78	3.24
③ 園と小学校の教員が、児童・保護者に関する情報を共有することは保護者支援に有効だと思いますか。	3.83	3.89	3.76
④ プログラム全般について、保幼小連携に取り組むことに関する負担感や阻害要因はありますか。	2.17	2.67	2.88
⑤ プログラム全般について入学前の保護者に対するフレッシュスタートプログラムは必要だと思いますか	3.33	3.67	3.47
⑥ フレッシュスタートプログラムを行うと、児童の学校適応は促進すると思いますか	3.33	3.44	3.43

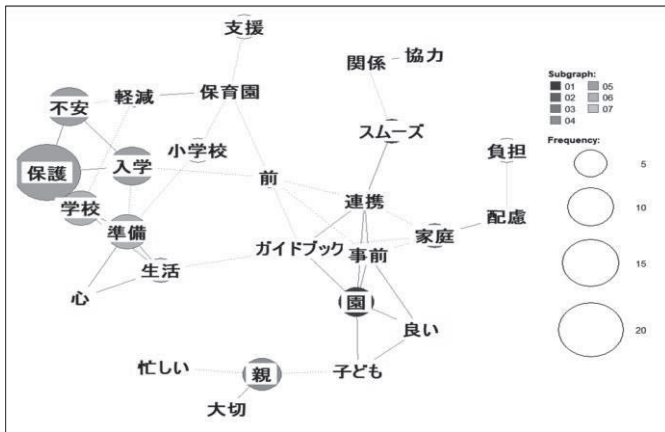


図6 職員が感じるFSPの必要性

保幼小の連携による保護者支援を軸とした FSP についての検証を在籍校と協力園、近隣の小学校の職員に4件法による質問紙調査(表9)を行い、HAD(鈴木, 2013)によるt検定を行った。

まず質問項目ごとに有意差のあった2点を以下に示す。「児童に関するシートは情報共有に活用できると思う(質問②)」と「FSPによって児童の学校適応が促進すると思う(質問⑥)」の回答を、対応のあるt検定を行った結果、児童のシートによる情報共有は学校適応の促進に対する期待よりも有意に高かった($t(34)=2.15, p=.039$)。これはFSPの実施において、「児童に関するシートでの情報共有」を活用できると捉えている職員は、児童の学校適応の促進を期待していることを示している。

また「児童・保護者に関する情報共有は保護者支援に有効だと思う(質問③)」と「FSPの必要性(質問⑤)」を、対応のあるt検定を行った結果、情報共有の有効性はFSPの必要性よりも有意に高かった($t(34)=2.45, p=.019$)。このことは情報共有が有効だと捉えている職員は、FSPが必要であると捉えている傾向にあることを示している。

次に、それぞれの質問項目の関連を検討した。「学校適応の促進への期待(質問⑥)」と「入学ガイドブックが保護者の不安軽減や児童の学校適応

に役立つ(質問①)」は有意な正の相関があった($r(33) = .401, p < .05$)。

また「FSPの必要性(質問⑤)」と「学校適応の促進への期待(質問⑥)」は有意な正の相関があった($r(33) = .354, p < .05$)。

このことから、入学ガイドブックを活用することで、児童の学校適応の促進に対する期待は上がり、FSPを必要だと感じている職員は、そのことにより児童の学校適応への促進が促されると捉えていることが示された。

この回答に対する理由として質問紙に記述された意見をKH coder(樋口)により、関連が強い語の共起ネットワークを作成し、解釈した。

まず全回答者の記述を内容分析した図6及び関連語から解釈すると、FSPの必要性について、「保護者の入学に対する不安軽減」は「学校と保育園の違いを知る」ことに近い関係にあり、「ガイドブックにより事前に連携することは子どもに良い」と示された。また「親が繋がる・始めることの大切さ」が示されていた。

また職員が感じているFSPの有効性について図7から解釈すると、入学前に学級担任は児童のシートを使って不安を軽減し、保育園や幼稚園での取り組みが繋がることが示されていた。

さらに小学校職員を除く園職員だけの記述では(図8)、心の教育への取り組みと学校と園が子どもを思うことにFSPの有効性が示されていた。

以上のことから、試行的に行ったFSPについての考察を以下に示す。

まず、保幼小の連携による情報共有は、保護者支援に関する情報を含めて、その意義は全ての職員が大切だと捉えている。保護者支援に関して不安を軽減するために、学校の様子を知らせること、具体的な入学準備についてガイドブック等の提示をすることの意義も捉えられている。

一方で、保護者支援に関する情報は、保育園や

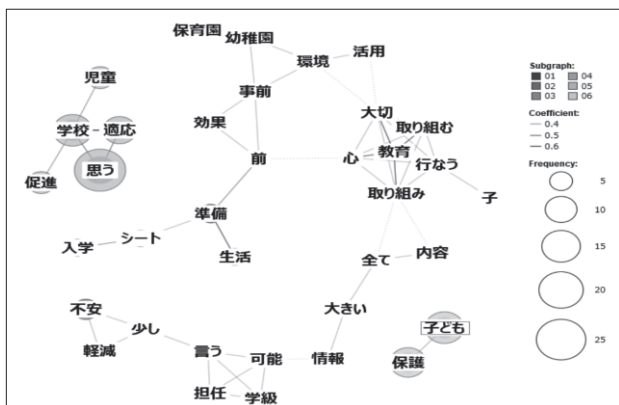


図7 全職員が感じるFSPの有効性

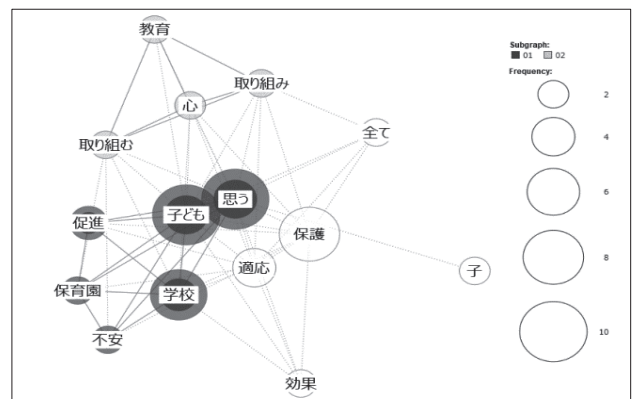


図8 園職員が感じるFSPの有効性

幼稚園が保護者との信頼関係を構築しながら獲得してきた貴重な情報であると共に、保護者への開示に適さないデリケートな部分を含むことから、その共有の方法には慎重さが求められる。故に聞き取りに代わる「児童のシート」の扱いについて、保育要録作成との整合性をとり、職員の負担を増加することなく必要な支援を適切に記述し、確実に共有できる工夫が求められる。

また、小学校が保幼と連携する中で入学ガイドブックを作成し活用することは、保護者の不安の軽減に繋がり、入学前後の具体的な養育の支援となった。保護者の養育に対する不安軽減によって児童の学校適応を促進させるという研究のねらいに即した結果である。

5 総合考察

この研究では、児童の学校適応の促進のために、保幼小の連携教育プログラムの作成を行い、検証した。その結果、接続期の保護者支援の視点をもって保幼小の連携を強化し、実践することは児童の学校適応に効果があり、必要性が高いと捉えられることが検証の結果示された。

福岡市は第5次子ども総合計画（2020）において、教育・保育における連携推進を掲げ、その中で携わる職員の資質や専門性の向上など、教育・保育を支える基盤を強化するとしている。本研究で示したFSPは、保育と教育の接続期にある子どもを支える保護者へ学校が行う一次的支援として機能することができる。と考える。

そして保幼小の連携は、地域にある公民館や保健所、発達教育センターなどの福祉的な援助資源との連携も視野に入れて進めていくことで、さらに充実すると考える。

学校は、すでにSSWやSCなど専門職としての援助資源を持ち、学校サポーター会議など地域の援助資源の中で機能する組織であることから、家庭教育・保護者支援の援助者としての自覚を持ち、適切な役割分担の下に、積極的に接続期の保護者支援を行うことが求められている。

今回の研究で示した「FSP等を用いた接続期における学校適応の促進」に欠かせない要素として、保護者支援の視点が挙げられる。どの発達段階でも保護者による児童への支えは必要だが、福祉と教育の両面を持つ接続期は、とりわけ保護者の支援が移行にあたっての環境変化に対応するように配慮し、保護者の養育を支えることが求められる。保護者支援は、保幼小の連携が推進されてこそ、

効果的に行われる。連携推進のためには、校内外の援助資源を効果的に活用するコーディネーターを配置することが理想的であろう。しかし現状においては、新たな人員配置を待つことなく、校内外の既存の職種の職務内容を整理し、保護者支援の視点で役割を明確にすることが重要である。

主な引用・参考文献

- 福岡市 2020 第5次子ども総合計画 <https://www.city.fukuoka.lg.jp/kodomo-mirai/k-kikaku/life/dai5jifukuokashikodomosougoukeikaku.html> (最終閲覧 2021. 12. 30)
- 福岡市教育委員会 2019 保幼小中連携推進教育の手引き
- 樋口耕一 2020 社会調査のための計量テキスト分析 ナカニシヤ出版
- 一前春子 2017 保幼小連携体制の形成過程 風間書房
- 木村 拓磨 2019 育児困難を感じる親に対する親教室の効果-こどもの発達センターとの連携による子育て支援-保育学研究 57号 102-113
- 宮澤孝子 2019 国内の教育政策動向 日本教育政策学会年報 26号 158-164
- 文部科学省 国立教育政策 2015 スタートカリキュラム スタートブック
- 文部科学省 2015 幼児教育実態調査 https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/27/10/_icsFiles/afieldfile/2015/10/28/1363377_01_1.pdf (最終閲覧 2021. 12. 30)
- 文部科学省 2019 家庭教育支援の具体的な推進方策について https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2017/04/03/1383700_01.pdf (最終閲覧 2021. 12. 30)
- 岡村恵 2019 育ちと学びをつなぐカリキュラム・マネジメントに関する研究 福岡教育大学大学院年報 第10号 203-210
- 大隈和彦 2014 幼小連携における教師間の相互理解に関する研究-幼小連携カリキュラムの計画・実施・評価・改善を通して- 福岡教育大学大学院年報 第4号 177-184

謝辞

本研究をまとめるにあたり、在籍校の先生方をはじめ、調査等で近隣小学校・保育園・幼稚園の先生方に多大なるご協力を頂きましたこと御礼申し上げます。また研修の機会を与您いただき、ご支援・ご協力いただきました福岡市教育委員会に深く感謝申し上げます、謝辞といたします。